B 国 独自 特・外

平成二十九年度 一般入学試験

国語科問題（B日程）

特別進学・外国語コース

第一問～第二問 独自問題〔四十分・百点〕

注意

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
二、この問題冊子は、十一ページあります。
三、試験中に印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたら手を挙げて監督者に知らせなさい。
四、答は問題の指示にしたがって、解答用紙（マークシート）に記入しなさい。
五、試験終了後、この問題冊子も集めますので下に受験番号を記入しなさい。

受験番号	

仙台育英学園高等学校

第一問　次の文章を読んで、あとの**問一**〜**問七**に答えなさい。

二一世紀は「知識社会」だという声がある。二〇世紀までは土地、労働、資本などが富をうむ源センだったのだが、今後は知識が鍵をにぎるという。なるほど、たとえば投資金融で利益をえようとすれば、各企業の製品開発力をただしく把握し、成長の可能性について的確な判断ができなくてはならない。そのための評価表のようなものが、「知識」と見なされているのである。具体的にいうと、評価表の各項目をなす断片的データのようなものが「情報」であり、この情報（データ）群を体系的にまとめあげたのが、いわゆる「知識」だと常識的に定義されているのである。

こういう「知識社会」ないし「情報社会」のとらえ方は、近年、非常にひろく受け入れられるようになった。その内容はおよそ次のようなものだ。評価の基準をきちんと定め、第三者からなる委員会などの機関をつくり、できれば数値指標にもとづいて正しく評価し結果を公表すれば、世界はますます透明になっていく。ネットは情報共有のために不可欠な重要手段であり、ネットを活用すれば、幾らでも知識を入手することができる。あとは市場※での競争にまかせれば、ものごとは万事うまく進んでいくはずである……。

いかなる知識も情報も、こうしてグローバルな経済秩序のなかにたちまち組みこまれてしまう。換言すれば、うまく組みこめないような知識や情報は、あっても無きものとされてしまうのである。[1]この種の考え方が、市場原理を奉じる新自由主義的なグローバリズム※の潮流によってもたらされたことは、今さら言うまでもない。いまや、企業活動だけでなく、行政も、教育も、医療も、福祉も、文化芸術などの活動も、ことごとくそういう社会的なメカニズムの一要素と見なされるようになったのだ。

だが、知識や情報とは本当にそういうものだけなのだろうか。こういった知のとらえ方は、いかにも実践的で効率的なもののように見える。だが実は、生命体としての人間の活動における知の役割というものを、根本的なところでとらえ損なっているのではないか。少なくとも、市場原理にもとづく「知識社会」や「情報社会」というイメージは、あまりに一面的すぎはしないだろうか。

（中略）

いちばん問題なのは、客観的な世界が存在し、しかるべき評価作業をおこなえば透明度がまして、世界の様子がわかってくるはずだ、という単純な思いこみである。この思いこみは、客観的な世界の様子を記述する知識命題※が存在し、それらを上手にあつめて記憶し編集すれば世界をより深く正確に知ることができるようになり、さらには世界をソウ作できるようになる、という常識的な考え方につながっている。

だが、実際には知識命題とは、それを学校で習おうとネットから検索してこようと、所詮は誰かがおこなった一種の解釈にすぎないのではないか。とすれば、所与※の知識命題がネットに海のようにあふれることで、かえって判断が混乱し、思考力が衰える恐れもあるだろう。もっと大切なのは、手際

よく所与の知識命題をあつめてくることではなく、自分が生きる上でほんとうに大切な知を、主体的に選択して築き上げていくことのはずである。

この点で、[2]近年の若い学生たちの様子について、一言ふれておくことにしよう。IT文明のなかで育った彼らは、いつもモバイル情報機器を身につけている。上手にネットを利用し、あちこちから知識命題を探してくるのは得意中の得意だ。いわゆるコピペレポート（コピー&ペーストの処理で、ネットのなかの断片的文章を繋ぎ合わせて作成するレポート）なら、たちまち要[c]リョウよくでっち上げてしまうだろう。

それはこちらもわかっているので、先手を打って、検索エンジンの役に立たない問題を出すことにする。「情報伝達とコミュニケーションとはどう違うか」などといった、正解が一つとはかぎらない、自分の頭で考えなくてはいけない問題である。すると、「わかりません」とすぐギブアップする者もいるが、結構いろいろ考えて、自分なりの面白い答を書いてくる者も少なくない。このあたりは、やはり若さの輝きだ。

だが[3]問題は、興味深い答を書いているにもかかわらず、「これはあくまで自分の個人的意見にすぎません」などと注記している答案が多いことである。中には、「こんなことを考えたって、何になるのかわからない」と率直な感情をぶつけてくる答案もある。

≪ A ≫ 、彼らにとって授業とは、既存の権威ある知識体系を単にわかりやすく伝授してくれるものなのだろう。彼らはそういう教育ばかりうけてきたのである。ほんとうの学問とは、既存の知識体系を丸呑(の)みにすることではなく、批判的に解釈することから始まるのだが、そういう作業は非効率な時間つぶしのように思っているのではないか。

受験勉強の弊害だといえばそれまでである。≪ B ≫それだけではない。知識社会というお題目のもとに、所与の知識命題の効率のよい処理だけが知的活動であるという幻想を植えつけた大人たちにも責任はあるのだ。

肝心なことは、ここでいう知識命題とは、[4]自分の行為や生活から練り上げた体験知ではなく、天下りにあたえられ、自分が手をふれて変更することなど不可能な「所与の知」だという点である。両者のあいだには本質的ちがいがある。この相違を理解するには、母語と外国語の学習の相違を考えればわかりやすい。

母語を学ぶ幼児は、周囲にある事物を名指ししながら、何とか家族とコミュニケーションをとろうと努める。そして生活のなかで[d]シ行錯誤をくりかえしながら、次第に事物の概念と音声記号の関係を身につけていく。一方、外国語の初心者はそうではない。初心者の努力はもっぱら、母語と外国語との対応関係を暗記することにそそがれる。つまり、外国語の初心者は、表向き外国語をつかっているように見えても、実はそれを頭のなかで翻訳し、母語の概念をもとに思考しているのである。だから外国語学習の場合、母語とちがって、家族や仲間内でしか通用しない※ジャーゴンを創りだしたりはで

（答はすべて解答用紙に記入しなさい）

きない。「それは日本人のよくやる誤りです」とネイティブに言われればそれまでだ。外国語の知識はあくまで「所与の知」なのである（もちろん、外国語に熟達してくれれば話はちがってくるのだが）。

「所与の知」は、外国語の知識だけにかぎらない。当然ながら、いわゆる※専門知の大半は、このなかに含まれる。≪ C ≫、自分では不法行為だと感じたとしても、法律家ではない普通の人は、法律の条文の専門的解釈がおかしいとは思わない。異ギ[e]をとなえられるのは、裁判官や法学者だけなのだ。実はネットのなかにあふれる知識命題のうちかなりの部分は、こういった専門知なのである。

だが、時代は変わり、すでに裁判員制度も導入されている。受け身の発想にとらえられているかぎり、※集合知の可能性は限られてしまう。もし専門知にかわる集合知という新たな知の枠組みを本気でもとめるなら、単にネットから所与の知識命題をあつめてくればよいというわけにはいかない。誰しもが、知の構築という困難な作業と向き合わなくてはならなくなるのである。

（西垣　通『集合知とは何か』（中公新書）より。一部省略がある。）

［注］

※ 市場＝金銭や物質を、やりとり、売買する国内・国際的な場。

※ 新自由主義＝現在の先進国のグローバル経済のあり方。市場を重視する。

※ 命題＝判断を記号や言葉で表したもの。

※ 所与＝すでに広く知られている知識や事実。

※ ジャーゴン＝この場合は、仲間内だけに通じる特殊用語のこと。

※ 専門知＝この場合は、過度に細分化された、種々の分野の専門研究のこと。

※ 集合知＝この場合は、インターネットを利用して他人同士が知恵を出し合い築き上げる知のこと。

問一　傍線部a、b、c、d、eのカタカナを漢字に改めたときに最も適切なものを、あとの①～④の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

a「セン」＝ ① 選 ② 仙 ③ 泉 ④ 線
b「ソウ」＝ ① 走 ② 掃 ③ 装 ④ 操
c「リョウ」＝ ① 領 ② 量 ③ 料 ④ 良
d「シ」＝ ① 施 ② 使 ③ 思 ④ 試
e「ギ」＝ ① 義 ② 議 ③ 疑 ④ 儀

問二　傍線部1「この種の考え方」とはどういう考え方のことですか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 経済のグローバル化のためには、世界中の人々が共感できる価値観を新たに作り上げていく必要があり、その材料を提供するのが知識や情報だとする考え方。

② グローバルな経済を成立させるためには、客観的なデータによる評価が必要であり、それを構成する要素として重要なのが知識や情報であるとする考え方。

③ 土地、労働、資本という二〇世紀型の経済活動に代わって、二一世紀に富を生む最大の鍵は知識であり、それを教育の場で優先的に教えるべきだとする考え方。

④ 生命体としての人間の活動より世界経済の場で利益を上げることを優先し、それを実現する目的でのみ学ぶ意味や価値があるのが知識や情報だとする考え方。

問三　傍線部2「近年の若い学生たちの様子について、一言ふれておく」と、筆者が取り上げた意味の説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① ＩＴ文明の中で育った学生は、知識命題を上手に集めて編集すれば世界をより深く正確に知ることができ、さらには世界を透明化できるという常識を、既に身につけているという例として。

② ＩＴ文明の中で育った学生は、自分が生きる上で本当に必要な知を主体的に選択して構築するために、常に携帯するモバイル機器を使用して知識命題を探し求めているという例として。

③ ＩＴ文明の中で育った学生は、ネットから所与の知識命題を首尾よく集めてきているだけで、どれが正しいか、自分にとって何が必要かを思考する力は衰えてきているという例として。

④ ＩＴ文明の中で育った学生は、誰かの一つの解釈に過ぎない知識命題の中から、自分に必要なものを選び取る判断を、情報機器を使いこなす日常を通して実践しているという例として。

（答はすべて解答用紙に記入しなさい）

問四　空欄≪　A　≫～≪　C　≫の中に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① A　たぶん　B　だが　C　たとえば
② A　たぶん　B　つまり　C　だが
③ A　つまり　B　たぶん　C　たとえば
④ A　つまり　B　だが　C　たぶん

問五　傍線部3「問題」について、この問題が生じる原因を筆者はどんな点にあると考えていますか。その説明として**適切でないもの**を、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 学生たちが学問を受験勉強の延長だと思い込み、大学で必要不可欠である自分の意見を書くことに対応できていない点。
② 学生たちが学問とは既存の知識を丸呑みにすることと思い込み、自分の主体的判断を学問の入口だとは考えていない点。
③ 学生たちが学問とは分かりやすく伝授されるものだと信じ込み、正解が複数ある可能性に気づく柔軟性に欠けている点。
④ 学生たちが学問には質の良い知的活動が重要だと信じ込み、時間のかかる作業にも率先して取り組もうとしている点。

問六　傍線部4「自分の行為や生活から練り上げた体験知」の具体例として**適切でないもの**を、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 留学生と会話して、そこに個人の考え方とその国特有の考え方が含まれていることに気づき、区別できるようになること。
② 一週間のスケジュールを書き出してみて、勉強時間や遊びの時間を見直し、生活のリズムを整える必要性を実感すること。
③ 近所のスーパーで、一個百円のリンゴと五個四九八円のリンゴではどちらが得かを、品質や使用目的をもとに考えること。
④ ガイドブックやインターネットの情報を見ながら日本全国を旅行し、その土地の名所を自分の目で確かめて記憶すること。

問七　本文の表現の特徴の説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 「……」を限定的に使用することにより、他者を非難する気持ちを暗に示している。

② 「だが」を多用することにより、常識を全て否定する自分の主張を表している。

③ 会話文を効果的に挿入することにより、取り上げた内容に現実味を持たせている。

④ 勧誘の口調である「～だろうか」を使用することにより、読者の共感を得ようとしている。

第二問　次の文章を読んで、あとの**問一**～**問七**に答えなさい。

> 和泉文彦（作中では「ブン」または「きみ」とも呼ばれる）は小学五年生。松葉杖をつく足の不自由な姉がいる。「きみ」は成績もよく、運動も得意で、クラスのヒーローだった。しかし、中西基哉が転校してくると、「きみ」はいろいろなことで中西に負けてしまい、わだかまりを持った。さらに、野球をめぐって二人は意地を張り合うことになった。本文はその続きから始まる。

跳ね返ってくるゴロを、きみはダッシュで中西くんの前に出て捕った。あっ、と声をあげた中西くんにかまわず、捕ったボールをすぐに塀にぶつけ、また自分で捕った。

「なにするんだよ！　返せよ、ボール！」

中西くんが駆けてくる。怒っている。「ふざけんなよ！」――怒鳴りながらきみの前に出て捕ろうとして、前にダッシュするきみと、ぶつかった。

走ってきた勢いは中西くんのほうがまさっていた。肩にはじきとばされた格好で、きみは地面に倒れてしまった。

中西くんもぶつかったはずみで足元がよろけ、ボールを捕りそこねた。バウンドの小さなゴロになったボールは、二人の背後に転がっていく。

（中略）

負ける。このままだと、今度もまた、負けてしまう。

中西くんに組み敷かれたきみは、地面の土を爪でひっかく

（答はすべて解答用紙に記入しなさい）

ようにつかんだ。目つぶし——そんなのだめだ、と手のひらを開き、土を捨てたとき、中西くんの頭上を白いものがよぎった。

ボールだった。驚いた二人が振り向くと、お姉ちゃんがいた。

「拾ってきてよ」

ケンカのことはなにも言わず、塀に届かずにバウンドしたボールを松葉杖で差して、「ほら、どっちでもいいから球拾いしてよ」と——やっぱり、そっけなく言った。

コンビニの袋からアイスもなかを三つ出したお姉ちゃんは、一つを自分が取り、一つを買い物をしてきたきみに渡し、もう一つを、遠慮して首を横に振る中西くんに無理やり押しつけた。

「捨ててもしょうがないんだから、食べればいいじゃん」

中西くんに向かっても、お姉ちゃんは無愛想な声で言う。でも、「ほら、食べちゃいなよ、溶けちゃうよ」とつづけた声は、なんとなくうれしそうにも聞こえた。

きみは黙ってアイスもなかをかじった。中西くんもうつむいて、もなかをかじる。お姉ちゃんを真ん中にして、ベンチに並んで座って——お姉ちゃんが自分の両脇に置いた松葉杖を中西くんはさっきからちらちら見て、そのたびに、うつむく角度が深くなっていく。

「いまのケンカ、ブン、負けてたと思う？」

お姉ちゃんに訊かれて、きみは「うん……」と低い声で答え、アイスをまたかじる。口の中で溶かさずに呑み込むと、みぞおちに冷たいかたまりが滑り落ちる感覚が気持ちよかった。

「正直じゃん」とお姉ちゃんは笑った。きみがコンビニでアイスを買っている間、お姉ちゃんは中西くんと一緒に待っていた。二人でなにを話していたのかは知らない。中西くんの様子からすると、意外とずうっと黙ったままだったかも、とも思う。

お姉ちゃんは、今度は中西くんに話しかけた。

「中西くんって、なんでもできるよね」

「……そんなこと、ないです」

「でも、デキる子だよね、中西くんは」

褒めているのに、褒めているようには聞こえない。

「負けたことなんて一度もないんじゃない？」

ブンもあんたが転校してくるまでそうだったんだけど、と付け加えた。

中西くんはうつむいたまま、そんなことないです、と言いかけたが、その前にお姉ちゃんは夕暮れの空を見上げてつづけた。

「でもさ、あんたも、いつかは誰かに負けるから」

ほんとだよほんと、と念を押して、「いいじゃん、それで」と笑った。優しい顔だった——から、わかるような、わからないような、難しいことを言う。

中西くんは一口だけかじったアイスを見つめたまま、なにも応えない。

お姉ちゃんは「ま、いいけどね」と自分のアイスをぱくっと大きくかじって、また空を見上げた。

「全然フツーの雲じゃん。来て、損しちゃった」

きみはあわてて「さっきは、きれいだったんだよ」と言っ

た。「ほんと、マジ、死ぬほどきれいだったの」

ふうん、とお姉ちゃんはアイスを食べながらうなずく。信じてくれたかどうかはわからない。ただ、べつに怒ってるわけじゃないんだな、とは思う。

「この公園に来るの、ひさしぶりだなあ」とお姉ちゃんは言った。

「来たことあるの？」

「子どもの頃……っていうか、そうだ、ブンと同じ、五年生の頃」

もう松葉杖をついていた頃だ。

「由香と遊んだの」

懐かしい名前だ。顔もまだ覚えている。お姉ちゃんのたった一人の友だち――いつか「親友なんでしょ？」と言ったら、[3]「知ったふうなこと言うな、バカ」と本気で怒られた。

お姉ちゃんは公園を見渡し、一人で納得してケリをつけたみたいにうなずいて、アイスを食べ終えてから松葉杖をついて立ち上がった。

「ねえ、アイスのお礼で、モデルになってよ。このままでいいし、こっち見なくていいから、アイス食べてて」

中西くんが気をつかって腰を浮かせかけたら、お姉ちゃんはデジタルカメラを構えながら「違う違う」と言った。「あんたたち二人ともモデル」

きみはためらいながら、お姉ちゃんの座っていたところに移って、中西くんとの距離を詰めた。でも、これも「違うってば」と言われた。「間が空いてなきゃだめじゃん、『友だちになる五分前』って感じで」

[4]ないないないっ、そんなのないよ――とは言えなかった。

ちらりと横を見ると、中西くんも耳の付け根を赤くして、あせったようにアイスをかじっていた。

写真をもう一枚撮ることになった。お姉ちゃんはジャングルジムを指差して、「二人とも、わたしが言うとおりの場所に登ってほしいの」と言った。

きみと中西くんは、立体の格子の「へり」の場所に腰かけた。お互いにそっぽを向いた格好で、段も、列も、ずれている。『ねじれの位置』というんだと、お姉ちゃんが教えてくれた。中学校の数学で習う言葉なのだという。

「口で言うのって難しいんだけど、二本の直線が、平行じゃないんだけど、交わらないの。ずれてるっていうか、空間の奥行きが違ってるっていうか……とにかく、いまのあんたたちみたいなのを、ねじれの位置っていうの」

よくわからない。ただ、横にまっすぐ手を伸ばしても、上や下にまっすぐ伸ばしても、二人の手はぶつからない。

お姉ちゃんは松葉杖をついて、ジャングルジムのまわりを歩く。モニターを覗いて首をかしげたり、「ちょっと違うかなあ」とつぶやいたり、ジャングルジムから遠ざかったり、また近づいたりして、なかなかアングルが決まらない。

中西くんが、ぽつりと言った。

「お姉さんって、足、ずっと悪いの？」

「うん……ガキの頃、交通事故に遭ったから」

声もねじれの位置になってるんだな、と気づいた。ねじれ

（答はすべて解答用紙に記入しなさい）

の位置のほうが正面から向き合うよりも話しやすいんだな、とも。

「さっき、オレがコンビニに行ってるとき、姉貴となにしゃべってたの？」

「なにも……お姉さん、ずっと写真撮ってた、雲の写真」

なんだよ、気に入ってたんじゃん、お姉ちゃん――。

「だからオレ、お姉さんって無口なひとだと思ってたんだけど」

「無口っていうか、無愛想だろ」

笑いながら言うと、中西くんも、ちょっと困ったふうに「うん、まあ……」と笑った。

ふと見たら、お姉ちゃんはジャングルジムからだいぶ遠ざかっていた。[5]遠ざかってくれたのかもしれない、と思った。

中西くんも同じことを考えていたのか、「それでさ……」と野球のことを切り出した。「オレ、マジ、リリーフでいいから」

理由があった。中西くんの投げるカーブやシュートはよく曲がる。でも、そのぶん、すぐに肘や手首が痛くなってしまう。

「でも、一イニングだったらばっちりだし、ストレートは和泉のほうが速そうだから、先発がおまえで抑えがオレだったら、絶対に打てないよ、相手」

なるほど、とうなずいた。いいじゃん、無敵の黄金リレーじゃん、と[6]胸がふわっと浮き立って、でもそれを悟られたくなかったので、「オレ、完投するけど」と言った。ねじれの位置は、わざとそっけなくしゃべるときにも、いい。

（重松　清『きみの友だち』（新潮社）より。一部省略がある。）

問一　二重傍線部A「そっけなく」、B「ケリをつけた」の本文中での意味として最も適切なものを、あとの①～④の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

A　そっけなく

① 簡単に　② あつかましく

③ 冷淡に　④ ふきげんに

B　ケリをつけた

① 返した　② 終わりにした

③ 再考した　④ 理由を考えた

問二　傍線部1「みぞおちに冷たいかたまりが滑り落ちる感覚が気持ちよかった」とありますが、この表現は「きみ」のどのような心情を表すものとなっていますか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 胸にあるわだかまりはまだ完全には消えなかったが、姉の問いに対して正直な思いを述べ心が軽くなっていったということ。

② ケンカに負けるいくじなしの自分だが、支えてくれる頼りになる姉がいることを思って安心感を抱いているということ。

③　姉に対していつも手ごわさを感じて苦手だったが、このときだけはなんとかうまく乗りきれそうに思っているということ。

④　ケンカをしたことで面白くないと思っていたことをぜんぶはき出すことができたので、すっきりした気分でいるということ。

問三　傍線部2「中西くんは一口だけかじったアイスを見つめたまま、なにも応えない」とありますが、このときの気持ちの説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

①　ケンカに関して自分は悪くないのに、「きみ」とお姉ちゃんのところから離れて行けない自分を情けないと思う気持ち。

②　お姉ちゃんがむりやりくれたアイスを一口食べたが、これ以上食べる気にはなれないので困ってしまっている気持ち。

③　お姉ちゃんに立てつづけに話をされるので、自分が言いたいことは何も口にできない不満を必死に抑えようとする気持ち。

④　お姉ちゃんの言うことを受けとめて、自分がケンカするまでに至った理由について考えを深めようとしている気持ち。

問四　傍線部3「『知ったふうなこと言うな、バカ』と本気で怒られた」とありますが、このことからお姉ちゃんはどのような性格の持ち主であることがうかがえますか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

①　すぐにかっとなり腹を立てやすい性格。

②　事実をきちんと区分けする厳格な性格。

③　自分の心に入りこむことをこばむ性格。

④　弟など目ではないという威張った性格。

問五　傍線部4「ないないないっ、そんなのないよ」とは、どのような思いを表している言葉ですか。その内容として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

①　姉に「友だちになる」と、自分の心の内に秘めた願いを言われたのであわてた思い。

②　姉に「友だちになる」と言われても、そんなことは絶対にないと強く否定する思い。

③　「友だちになる五分前」と言われたが、もう自分は友だちになっているという思い。

④　「五分前」の距離よりも、間を詰めた方がモデルのポーズとしていいという思い。

（答はすべて解答用紙に記入しなさい）

問六　傍線部5「遠ざかってくれたのかもしれない」とありますが、これはどのようなことですか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 姉は自身の無愛想な性格が中西くんの口を閉ざしていると気づいて去ったのだということ。
② 姉はケンカの決着を二人の間の責任だとしてはじめから関わりは持たないのだということ。
③ 姉は自分たちがクラスの大事な話をするのを知って聞かないようにしたのだということ。
④ 姉は自分たちの仲直りを信じそのためにふさわしい位置を作ってくれたのだということ。

問七　傍線部6「胸がふわっと浮き立って」とありますが、これはどのような気持ちの表れですか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 「きみ」は中西くんとの距離がぐんと縮まったことを意識し、喜びにあふれたということ。
② 「きみ」は中西くんが自分を評価してくれたので、落ち込んでいた気持ちが消えたということ。
③ 「きみ」は野球で思いどおりの活躍ができ、絶対に勝利をつかめると確信できたということ。
④ 「きみ」は中西くんの思いやりを感じ、それを素直な気持ちで受けとめられたということ。

（答はすべて解答用紙に記入しなさい）